様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：２４４０３
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３４０２０４４

研究課題名（和文）欧米多民族社会における日本型新宗教の受容と発展―新たな共同性と宗教の役割

研究課題名（英文）Adaptation and Development of A Japanese New Religion in Europe and USA-Emergence of New Community and the Role of Religion

研究代表者
秋庭　裕（AKIBA, YUTAKA）

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：４０２２２５３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　14,100,000円

研究成果の概要（和文）：５年間の本課題調査研究で、アメリカ・イギリス・イタリアにおいて９回実査を行った。得られた仮説は以下のとおりである。
以前のアメリカ調査研究で得られた「２段階の宗教現地化」仮説は、ヨーロッパにおいては「跛行的」であることを見出した。それは、日蓮仏教(SGI)という外来宗教を受容する現地の、社会状況（経済的・階層的・文化的・地域格差の存在の有無）、SGIの教団組織の特徴（非営利団体・社会貢献的目標）などの要素が複合的に作用し、キリスト教とは対照的な現世的救済観、魅力的な日本人リーダーの存在などと相まって、多様な（しかし、モデル構成可能な）パターンを描くことが説明できる。

研究成果の概要（英文）：During the course of this research, we conducted a total of nine SGI field surveys. As a result, we have been able to make the following findings. The Two-step Hypothesis of the localization of Japanese New Religions was formulated in our previous studies at SGI-USA. In the Europe, we have found that it is not simply a two-step process but a process that progresses along a winding path.
Using the data obtained from our recent research in Europe, we have discovered that in actuality this process takes form across a number of different and dynamic stages. We can depict and explain the manifold patterns emerging from the combination of a complex interplay between the social conditions of the areas in question where the non-local religion Nichiren Buddhism is brought and the characteristics of the SGI organization as a religious group, along with the soteriology of this- worldly benefit which is in contrast to Christianity and the presence of its charismatic Japanese leaders.

研究分野：宗教社会学

キーワード：SGI-ITALIA　SGI-UK　SGI-USA　創価学会　日本型新宗教　日蓮仏教　SGI Buddhism　現世的救済観

１．　　研究開始当初の背景

（１）今日、創価学会インタナショナル Soka Gakkai International (SGI)は、世界 192 カ国・地域に展開し、会員数は 1,200 万人を越え、わが国の宗教としては例外的といってよいほどの規模で海外へ伝播している。しかしながら、SGI についての研究は、その規模に釣り合う量とまた質も欠いている。また、SGI の母体である、創価学会本体の研究も、歴史的な経緯もあって、やはり決して豊富とはいえない現状がある。

（２）このような現状をふまえ、本研究は、2008 年度から 2010 年度にかけて実施したアメリカ合衆国の SGI-USA 調査研究を踏まえ、SGI と創価学会についての宗教社会学的な研究の欠落を補おうとするものである。

創価学会は、わが国でも抜きん出た大教団であり、また、今日、政権の一翼を担う公明党と一貫して緊密な関係にあり、政治への関与も顕著なものがある。

宗教一般、とくには「新興宗教」が嫌われるわが国の風土において、なぜ創価学会は大教団になり得たのか。

創価学会などの新宗教が急成長した戦後から高度経済成長期は、世俗化が進行した時期である。経済成長と世俗化の進行の関連は、ヨーロッパの国際比較の計量分析では多くの実証例がある。それらによれば、経済成長するほど、世俗化が進行する。つまり、宗教は衰退する。では、なぜ、ひとり日本・創価学会は、高度経済成長期において急成長したのであろうか。

これまでの日本の宗教社会学研究は、世俗化期に急成長をとげた、世界的見てもまれな創価学会の発展を十分に解明できていない。しかしながら、急成長の後、すでに 40 年以上停滞期にある現在の創価学会を研究するだけでは、往時の急成長の要因とメカニズムを捉えることはできないだろう。

（３）そこで本研究は、現在海外で活発に展開する、日本人・日系人の枠を越え現地への顕著な「適応」を示している SGI に着目し，調査を実施しようとするものである。SGI ほどの規模で海外で受容された日本型新宗教は他には存在しない。

その適応の要因を探ることで、グローバリゼーション下、キリスト教を基盤とする社会において展開する、日本型新宗教の本質を理解しようとするものでもある。

2008 年度から 2010 年度にかけて実施した SGI-USA 調査での知見を踏まえ、同じくキリスト教を基調とするヨーロッパの諸国との比較を行い、日本型新宗教の特徴をより深く明らかにしようとするものである。

アメリカ合衆国は、現代社会を特徴づけるグローバリゼーションの最先端の地の一つであり、グローバリゼーションのよって民族の多様化がいっそう促進され、新たな階層分化や社会倫理が生じ、異文化の混交が加速度的に増大している。これらの点に着目し、①エスニシティ、②階層文化、③社会倫理　④異文化への適応状況などの観点からアメリカ合衆国における SGI の調査研究をある程度実施したが、それをさらに進めるとともに、ヨーロッパではイギリスとイタリアを取り上げ比較研究を実施する。

（４）高度経済成長期に急成長した日本・創価学会の研究は、鈴木広の「創価学会と都市的世界」、塩原勉の「創価学会イデオロギー」の２論文などごくわずかである。これらによって、社会の流動性やイデオロギーの面から創価学会の拡大要因が部分的には明らかにされたが、高度成長期を通じて、創価学会は研究者に門戸を開いていなかったので、それらに続く本格的な社会学研究は、行われなかった。

調査研究が困難であった国内に比べて、海外での布教についての研究は、いくつか行われた。井上順孝『海を渡った日本宗教』(1985) と、中牧弘允『日本宗教と日系宗教の研究』（1989）などを挙げることができるが、これらの研究は日系人以外への拡がりを十分には扱っていない。その理由は、時代的に、SGI が「現地化」する以前であったからである。近年の渡辺雅子『ブラジル日系宗教の展開』（2001）は、日系人以外への拡がりも扱っているが、救済観の現地化や現地人の価値観との葛藤などの観点からの分析があまり含まれていない、組織の側面からの研究が中心である。

（５）西欧における SGI 研究の進展としては、B.Wilson & K.Dobbelaere “A Time to Chant”(1994), P.Hammond & D.Machacek “Soka Gakkai in America”(1999)などが代表的である。

“A Time to Chant”は、SGI-UK をとりあげ、日蓮仏教に特有な「唱題」の社会的機能に着目し、それがイギリス社会の社会構造とどのように結びつくのかを論じている。会員は唱題のもたらす強い自己肯定性に導かれ、能動的な社会活動をおこなうことで、「脱物質主義」的な態度を形成する道筋を指摘している。

一方の“Soka Gakkai in America”は、会員が 20 万人を越えるといわれているアメリカ合衆国において、SGI をとりあげた。同書は、教えと社会構造の相互連関とその社会学的な機能よりはむしろ、メンバーの社会的属性と布教のネットワークなどについて丹念な調査が実施されている。

これらの学術的背景を踏まえ、研究代表者と分担者は過去６年間に、ハワイ、ロサンゼルス、ニューヨークなどを調査し、データを収集し、現地の SGI 職員と会員へのインタビューを行った。その中で、以下の「２．研究の目的」に挙げるような今後の研究課題を見

出した。

２．　研究の目的

（１）　本研究は、上述の「背景」をふまえ①エスニシティ、②階層分化、③社会経済状況、④異文化への適応のなどの観点から調査研究を実施する。

①エスニシティと宗教と、かなりの程度は階層構造とも対応関係が明らかなアメリカ合衆国において、SGI はそれらを横断し人々に新たな連帯をもたらすことが確認できた。これらの機能が、社会構造の成り立ちの異なるヨーロッパにおいて見出されるか否か、そして、見出されないとき、それに代わる社会学機能を果たしているのかを確認する。

②階層分化と③社会経済状況。日本の創価学会は、階層的には下層の人々の間から広まった。また現在でも中心を担っているのは、中高年女性であるという特徴が存在する。一方、SGI－USA の会員は、若年または中年層で高学歴、専門職（志向）の人々が多いなどの特徴が指摘されている（Hammond & Machacek)。またこの特徴はイギリスにおいてもかなりの程度共通している（B.Wilson & K.Dobbelaere)。この点についてもデータを収集し明らかにする。また、日本では創価学会の日蓮に基づく教えが、高度経済成長期の下層の人々の上昇移動への強い意欲を掻き立てたが、この教えが合衆国、そしてヨーロッパの人々にどのように受容され、どのような社会的志向性を形成しているのかを調査分析する。またその際、調査対象地域の経済的状況の変化にも充分注意を払いデータを収集する。

④異文化への適応。日本の創価学会は、一般に集団主義的であるととらえられている。日本文化に由来する宗教が合衆国に定着するとき、伝統や習慣の差異によって、さまざまな葛藤やコンフリクトを引き起こしてきた。SGI-USA においても、個人主義的なアメリカ合衆国において、日本的伝統の色濃い行動様式が葛藤を引き起こしたが、次第に日本で見られるのとは異なった組織の運営や儀礼が行われるようになった。この組織と組織文化の「アメリカ化」のプロセスは、幹部スタッフへの現地人の登用や法華経や日蓮の著作などの紹介と、その英語化に典型的に現れると考えられるので、このプロセスを詳細に調査する。この現地化のプロセスは、ヨーロッパにおいてはどのように進展したかについて、アメリカ合衆国と比較しながら研究を進める。

（２）上記の項目の調査・分析を行うことで、①創価学会の社会学的研究に貢献でき、②日本人・日系人ではなく、現地の人に広まった日本型新宗教を研究し、③同時に、グローバリゼーション時代における宗教のエスニシティ・階層・社会倫理・異文化への適応のメカニズムと論理を明らかにすることを目的として本研究を実施する。

３．　研究の方法

これまで実施した SGI-USA 研究の成果を踏まえ、同じくキリスト教を基層宗教とするヨーロッパとの比較において、「研究の目的」で述べた諸点についてデータの収集と検討を行っていく。具体的な調査の焦点は、以下の通りである。①教団組織とメンバーについての基礎データの収集を行う。ヨーロッパにおける調査対象国の信者数と信者組織の変遷、また経典類の翻訳のプロセスを把握する。②典型的なメンバーと特徴あるメンバーについて、綿密なインタビュー調査を実施する。

①については、当該国の教団本部に対してインタビューを実施し、基礎データの収集と組織の発展拡大の過程を跡付ける。また、経典類の現地語への翻訳過程の資料の収集と儀礼や集会の変化を調査することで、基礎的なデータを得るとともに、教えの「現地化」の過程を把握する。

法華経や日蓮御書の経典類は、信者の教えの受容において、重要な機能を果たしているが、その用語や表現は逐語訳の段階を経て、「文化的な」翻訳に到ったといわれている。経典類も、儀礼や集会も本質的には日本も SGI も同質であると考えられるが、その形態や運用は、翻訳における意訳のように変化があったようである。その詳細を調査する。

②については、対象国・地域とエスニシティ・階層構造や社会的属性に注意し対象者を選定し、綿密なインタビューを実施する。調査対象国の歴史性や宗教社会学的な特徴を反映できるようにインタビューイーを選択する。

インタビューの最終的分析は、秋庭裕・川端亮『霊能のリアリティへ』（2004 年）において導入した、質的データ分析のための「計量テキスト分析」と、信仰者の生活世界の全体性を把握するための「物語論的ライフヒストリー分析」を用いておこなう。「物語論的ライフヒストリー分析」は、計量テキスト分析と組み合わせることで、ライフヒストリーをグラフ化し、解釈する方法である。これらによって、ライフヒストリーを鳥瞰することができ、話者の語る世界や人生に、私たちはある形象を与え一望することができる。そこでは、話者自身の意識しないレベルにおける、有意味な観念の連合をとり出すことができる。救済観のように高度に抽象的な宗教観念は、言葉で明示的に描き出される部分は限られているので、このような分析ツールの創意工夫することで分析のレベルを上げることができる。

４．　研究成果

これまで私たちが実施した、アメリカ合衆国における SGI の調査研究から導き出した、日本型新宗教の「２段階定着仮説」は、今回のイギリスとイタリアにおける調査研究で

得られた成果によって、よりいっそう発展させることができた。

「２段階定着仮説」の概略を示せば以下の通りである。つまり、日本型新宗教は最初はただ「宗教」として、つまり教義や価値・理念、あるいは儀礼に限らず、それらの周辺に付属する様々な「日本的」な価値・規範や思考様式と行動様式と渾然一体になって持ち込まれる。例えば、日蓮仏教に特徴的な唱題行や勤行は、日本におけるように必ず「正座」して行う教義的な必要はない。したがって今日では世界各地で椅子に座るなど、各地の生活習慣に応じて、いわば「カスタマイズ」されている。しかしながら、日本国外に布教が開始された当初はそのような現地化は禁じられていた。

それが、アメリカ合衆国においては布教開始から15年ほど経過した70年代の半ば以降、激しく批判され、日本「文化」と区別された日本出自の「宗教」として定着していく過程が始まった。またこのプロセスは、民族集団ごとのセグリゲーションを克服する契機と結びついて進行したことが重要である。SGI-USA はエスニック・グループごとの境界を越えて会員をリクルートすることに成功している。これが「２段階定着仮説」の骨子である。

上記の仮説が、ヨーロッパにおいてどこまで、あるいはどのように当てはまるのか、イタリアとイギリスにおいて調査を実施し、以下のような考察を行った。

イタリアＳＧＩは、ヨーロッパでは最大規模で、６万人を越える会員が活動する。その歴史は、アメリカやイギリスとほぼ同じ1961年に池田大作が訪問して始まるが、1970年代半ばまではあまり発展が見られなかった。もちろん、会合ではイタリア語が使われ、英語の印刷物なども入ってくるが、規模は拡大しなかった。

1970 年代後半のアメリカ人ミュージシャンの布教により若者が多く入会する。1980年代にかけてフィレンツェ、ローマ、ミラノで拠点が設けられ、日本人の初代理事長がリーダーシップを発揮し、創価学会の教え、組織、運営方法をイタリアに導入していく。

その後、1990年代は、そのリーダーシップとイタリア人会員との葛藤が表面化していく時期であり、日本文化と創価学会の教えの見極めや、リーダーを含めた組織の非民主的な側面が問題となってくる。

そして、2002年に日本人の二代目理事長に交代して後、組織の現地化が進められ、イタリア語の日蓮御書も出版され、主要な拠点の会館が新しくなり、会員数も増えるのである。

なぜイタリアがヨーロッパ随一の発展をしたのか、というのは興味ある問いであり、英語文献のいくつかでも検討されているが、そこでは座談会の機能や「人権展」などの行事が果たす機能など、どこの国のＳＧＩにでもあてはまる特徴が挙げられており、イタリア固有の要因に触れたものは見られない。

その要因ついて、まだ暫定的な結論しか示せないが、一つにはイタリアには、強力なカトリックのベースがあって、人々に基層的な宗教心が身についている一方で、カトリックの無力さや日常生活で習慣化されていないこと、聖職者の腐敗があることによると思われる。つまり、ある程度のカトリック信仰の強度は、日蓮仏教の受容に際し促進的に作用すると考えられる（強すぎると南イタリアのように障壁になる）。

二つ目にイタリアは地域による違いが大きいが、北部（ミラノ）、中部（フィレンツェ）、南部（ローマ）の三地域に優れたリーダーがいたこと、三つ目に家族主義的なイタリアにおいて、家族の問題からＳＧＩに入会し、親密な家族関係の中で人間革命が目に見え、家族に理解されていくことがあげられる

ＳＧＩ－ＵＫの発展については、イギリス社会の変化との関連性において分析する。

A Time to Chant では、ＳＧＩの理念と活動が、救済のために要求される禁欲的倫理の拒否、楽しみを追及することへの肯定、罪の意識の拒否と個人の自律と責任意識の必要性、といった新たな価値規範を提供し、今日の若者の性向の多くに正当性を与えていると結論づけている。

A Time to Chant は、ＳＧＩ－ＵＫの運動を信者の典型的な社会応答パターンとの関連で考察している。しかし、21世紀に入ってからＳＧＩ－ＵＫの発展が顕著となっている実態の解明には、年代順及び、歴史的な分析の観点から、社会構造の変化と合わせて分析することが重要である。

ＳＧＩ－ＵＫの活動は、第１期(65-73年)、日本からの広宣流布として始まる。第２期第１ステージ（74-79 年）には、英語化、現地化が進展する。そして、第２期第２ステージ（79-85 年）には折伏キャンペーンが活発化し、会員数千人規模に成長する。しかし、第３期第１ステージ（86-89 年）は、停滞期となる。第３期第２ステージ（90-95 年）は、活動疲れが顕著化し、活動と組織のありかたの検討（Reassessment）の時代となる。上記の第２期、第３期はコーストン初代理事長がリーダーシップをとった時代であり、組織の土台作りの時期であった。英語テキストの充実、組織・人材育成といった成果があったが、日本的あり方や強いリーダーシップに疑問も生じた。

Reassessment を経て、第４期（96-02年）は、組織の民主化が進められ、若手人材が幹部に登用される。21 世紀に入り、第５期（03-13 年）には会員数が３倍となり、発展期に入る。第６期（14-）の現在は、継続発展の時代といえよう。このような組織の時代ごと変化と社会のエートスとも関連付けて、21 世紀に堅調な発展を見せるＳＧＩ－ＵＫの吸引力を幹部職員、会員２５名のインタビューから検討した。

暫定的な結論として、以下を記しておく。多くのメンバーが入会前に「貧、病、争」の問題に直面していた。問題解決に至る方途として題目をみいだし、唱題の利益、実証に魅力を感じて信仰を継続している。キリスト教的世界観、罪の意識とは正反対のＳＧＩの現世における楽しみや幸福の肯定、願望の成就、人間革命、生命哲学に惹きつけられる。世俗化が進むＵＫにおいて、ＳＧＩ－ＵＫの組織の土台が整った 20 世紀末から、資本主義社会・新自由主義社会への不信、ＵＫ社会が目指す包摂社会という理想との現実のギャップ、文化多元主義の試練などを内包する時代に自らの人生と社会に対する不安を抱える彼ら、彼女らの心にＳＧＩの人間革命、生命哲学が響いたのではないだろうか。

本研究に先立つアメリカ合衆国における調査研究と、今回のイタリアとイギリスにおけるヨーロッパ調査で得られたデータを比較対照すると、仮説的な結論であるが以下のように述べることができる。

SGI Buddhism（という命名を提案したいと考えているが）は、世俗化が進みすぎていない（ある程度は進んでいる）、しかし、伝統宗教が強すぎない（ある程度は強い）、産業化や近代化へのステップの発展途上段階に位置付けられる社会状況に適合的な傾向が見出せるだろう。それは、おそらく、創価学会が大発展を遂げた戦後日本社会の状況もこれに似ると考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

①川端亮、宗教的信念における共通の因子−８カ国調査の結果から−、大阪大学大学院人間科学研究科紀要、42 巻、査読無、2016、189−208 頁

②秋庭裕、SGI-USA の 50 年（1）−アメリカ合衆国における創価学会インタナショナル−、人間科学：大阪府立大学人間社会学研究科紀要、９巻、査読無、2014 年、63−99 頁

③稲場圭信、日本人の利他性と「無自覚の宗教性」、中央公論、2012 年５月号、査読無、40−47 頁

④稲場圭信、東日本大震災における宗教者と宗教研究者、宗教研究、373 号、査読有、2012 年、29−52 頁

〔学会発表〕（計 7 件）

①秋庭裕、SGI-USA の 55 年−Phase II 再考−、日本宗教学会第 74 回学術大会、2015 年９月６日、創価大学（東京都八王子市）

②川端亮、ヨーロッパにおける SGI−リーダーシップと現地での受容−、日本宗教学会第 74 回学術大会、2015 年９月６日、創価大学（東京都八王子市）

③稲場圭信、世俗社会における SGI−イギリスを事例として−、日本宗教学会第 74 回学術大会、2015 年９月６日、創価大学（東京都八王子市）

〔図書〕（計 4 件）

①川端亮、有斐閣、宗教の二面性−否定的イメージと人の幸せ（社会意識からみた日本−階層意識の新次元（数人直紀編））、2015 年、198−201 頁（全 290 頁）

②稲場圭信、弘文堂、利他主義と宗教、2011 年、224 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

秋庭　裕（AKIBA YUTAKA）
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：４０２２２５３３

(2)研究分担者

川端　亮（KAWABATA　AKIRA）
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：００２１４６７７

稲場圭信（INABA KEISHIN）
大阪大学・人間科学研究科・准教授
研究者番号：３０３６２７５０